

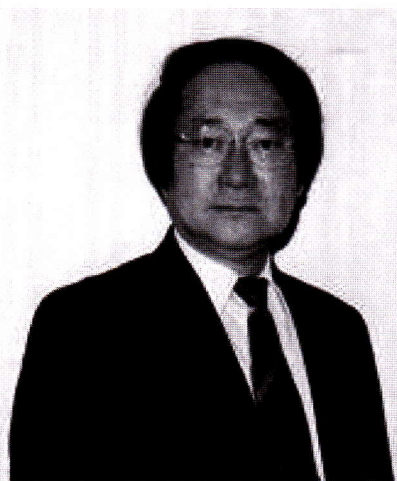
日本微量元素学会 功労賞受賞挨拶

第6代、第7代 理事長 荒川 泰昭

この度は、功労賞の荣誉に与り、ご推挙いただきました池田稔理事長はじめ、森山光彦大会会長、理事、評議員および会員の皆様のご厚情に心よりお礼申し上げます。

この賞の設置は以前からの懸案でございましたが、私が理事長を仰せつかりました第6～7期になってやっと実現し、先駆的業績を挙げられ、創設期より長きにわたり学会の発展ならびに微量元素研究の向上に貢献されました先輩諸先生方にお贈りさせていただくようになりました賞でございます。このような賞をいただけますことは大変光栄に存じます。

さて、振り返れば、第2回国際微量元素医学会（東京）でのがん部門の座長に始まり、第1回日本微量元素学会から今日に至るまで、学会とともに歩んだ22年ですが、その間、理事として学会運営に携わらせていただき、2006年には第17回大会会長、2005年～2011年の6年間は第6代、第7代の理事長を務めさせていただきました。本学会との関わりや実際の学会運営については、日本微量元素学会設立20周年記念の際に、学会誌第20巻4号（2009年）「創設20周年を記念して」に記述させていただきましたので、ここでは私が微量元素に関わり始めた経緯の一端を認めさせていただきます。



東京大学薬学部時代は、薬品分析化学教室（田村善蔵先生）で生体内糖類（中性糖、アミノ糖、酸性糖、シアル酸、オリゴ糖、ムコ多糖）の分析法を開発し、糖タンパク質、血液型物質の分離・精製や糖鎖構造の解析・解明、特異的ながん抗原の検索・同定など、主として細胞膜表面抗原の解析ならびに膜情報伝達系の研究を行っていましたが、東京大学医学部時代に衛生学教室（山本俊一先生、和田 攻先生）で「生体機能による毒性評価とその学問体系の構築」を目指して、有機スズを中心とした微量金属の免疫毒性学的、脳神経毒性学的ならびに内分泌毒性学的研究、有機スズの制がん作用や抗炎症作用の発見に端を発したその作用機序解析の研究、後の環境ホルモンの発端となった有機スズによる海洋汚染の研究などを開始したのが微量元素と関わり始めた最初です。（これらの研究は、後に日本免疫毒性学会、環境ホルモン学会（日本内分泌攪乱化学物質学会）、国際海洋会議、「スズと悪性腫瘍」ほか、スズを中心とする第14族元素に関する種々の国際会議などの創設へと発展いたしました。）

その後、有機スズによる脳神経機能障害（海馬亜鉛の消失と記憶障害、嗅覚障害：アルツハイマー酷似症状、血液脳関門の老化）、免疫機能障害（胸腺萎縮とT細胞性免疫不全）、内分泌機能障害（精巣萎縮、生殖機能障害）などの生体機能不全が亜鉛欠乏による誘発症状と常に酷似することから、有機スズと亜鉛との拮抗（あるいは相性）に気付き、以後は亜鉛欠乏と有機スズ暴露の発現症状を常に比較しながら、生体機能のメカニズムを解析いたしました。この微量元素を栄養と毒の両面から捉えるスタンスが、後の生体機能による栄養評価や毒性評価、さらには生体機能別にみた微量元素の栄養、薬効ならびに毒性（病的老化）とその発現機構の機序解析の研究の契機ともなりました。

本学会は、種々の分野の方々が集まった学際的な会であり、微量元素の研究を中心に集まった非常にレベルの高い専門家の集団です。したがって、会員数の極端な増員は望めませんが、発足以来、この22年の間に先駆的業績を挙げられている先生方のリーダーシップのもとに会員の皆様方のご研鑽とご活躍により、日本における微量元素研究の唯一かつ中枢の学術集会へと発展して来ております。

そして、医薬品から食品、環境化学物質に至るまで、微量元素の有用性の開発はもちろんのこと、その栄養学的ならびに毒性学的なアセスメントの必要性は国の内外を問わず益々高まっております。それだけに、本学会の存在は大変貴重であり、今後益々発展していくものと確信しております。

最後に、本学会の益々の発展と会員の皆様の益々の発展を祈念いたします。

BIOMEDICAL RESEARCH ON TRACE ELEMENTS

2012 Vol.23 No.3

日本微量元素学会

Japan Society
for Biomedical Research
on Trace Elements